

連載

関西釣り文化を探る (第2回) 佐々木 洋三

瀬戸内海が果たした役割

漁具を育んだ瀬戸内海

瀬戸内海は単位面積当たりの漁獲量は地中海の25倍と言われ、世界でも比類のない好漁場です。これは瀬戸内海の地形が「瀬戸」と呼ばれる海峡部と「灘」と呼ばれる開けた海が連続しているために海水が掻き混ぜられ、酸素や養分が海全体に行き渡り、魚貝類の餌となるプランクトンが豊富だからです。

そんな瀬戸内海では、原始時代から今日まで多彩な漁具が発達してきました。香川県高松市五色台には、眼下に瀬戸内海国立公園を見下ろす『瀬戸内海歴史民俗資料館』があります。瀬戸内地方の歴史、民俗等に関する資料や漁撈用具を収集し、その数はなんと12万点超。大山真充館長から漁具について興味深いお話を伺いました。

サワラのデコイと古代のタコツボ

写真のサワラのデコイのような漁具は、松の木を材料にした漁師の手作りで、腹部に10kgの重りをはめ込み、目は貝殻、抱えてみるとかなりの重さです。船の舳先から流しておく、仲間と勘違いしたサワラが集まり、それをモリで突いたといえます。

また、タコツボ漁は古代より盛んだったと見え、海が荒れた翌朝に高松沖の男木島や女木島の砂浜を歩くと弥生時代や奈良時代のタコツボが今でも砂浜に打ち上げられます。イダコの壺は弥生時代から、マダコは奈良時代から作られてきました。こうした古漁具からも瀬戸内海で様々な漁が発達してきたことが判ります。



サワラのデコイ (地方名:ミセド)を抱える大山館長(右)と筆者



弥生時代のイダコ壺 (二枚貝で作ったものもある)

釣り糸革命とテグス行商船

日本で初めて透明な釣り糸「テグス」が使用されたのは鳴門で、なんと今から300年も前の正徳年間(1711~1715年)のこと。司馬遼太郎の「街道をゆく-阿波紀行」によれ

ば、江戸時代に堂浦(徳島県鳴門市)の漁師が大坂見物に出かけた折、薬問屋で中国から輸入された生薬を梱包している半透明の糸に目が止まり、これを釣り糸に応用したので

した。「楓蚕(ふうさん)」という蛾の幼虫の錦糸を酸に浸して引き伸ばしたもので、日本人がその製法を知ったのは文化年間(1804~1818年)の初め頃といわれています。

さて、理想的なテグス糸を見つけた鳴門の漁師は、薬問屋の主人に相談し、梱包用の糸だけを輸入するようになります。そうして瀬戸内海沿岸の津々浦々の漁港を回ってこれを販売する「テグス行商船」が登場しました。堂浦で昭和47(1972)年までテグス行商を営んできた「大神丸」のご主人に聞くと、夫婦二人で50~60日間かけて鳴門から和歌山県(加太)経由で九州(大分県佐賀関)まで往復して各漁港を廻ったそうです。このときテグス糸を売るだけでなく、行商船の周囲に漁師を集めて各地の「釣り情報」も提供しました。

佐賀関が発祥の鯛ラバ釣りが瀬戸内海の津々浦々から加太まで伝わったのは、このテグス行商船が媒介したからです。そして大神丸を最後にテグス行商は瀬戸内海から姿を消しました。船の動力が無かった時代に瀬戸内海の潮流は「北前船」などの海運を発達させましたが、釣り文化もこの潮流が伝播させたのです。



カラフルな模様が描かれたテグス行商船「大神丸」(瀬戸内海歴史民俗資料館)

関の鯛釣り唄

その佐賀関では、元禄時代の民謡「関の鯛釣り唄」が伝承されています。元禄といえば、近松門左衛門が活躍した時代で、歌詞には真鯛を大坂天満の雑魚場へ卸すようすも唄われています。活きた鯛をイケスに入れ、大坂まで漕ぎ渡ったのです。國學院大学の阿部常樹客員研究員の研究によれば、江戸時代中期の真鯛一匹の値段は現在の18万円と極めて高価だったといえます。それにしても、元禄時代から活鯛を大坂に運んだというのは驚きです。

♪ナマイヨ<鮮魚>にヤサー立ててナー
大坂ジャコバ<雑魚場>のサアヨー言うたノー
朝売りじゃいノー
ハアヤンサゴッチリ ゴッチリ
船頭 プリかな鯛かな
鯛じゃい 鯛じゃい♪

